令和五年度　一般選抜Ⅱ期問題　国語

〔一〕　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「話しことば」はどんどん変化していく。「書きことば」は「話しことば」の変化を後からゆっくり追うはずで、場合によっては、「話しことば」の変化になんとなくにしても「ブレーキ」をかけるようなこともあるだろう。「書きことば」が「ブレーキ」として機能しなくなると、言語の変化は「話しことば」側で加速することになる。「書きことば」が「打ちことば」の影響をうけて「話しことば」に引っ張られている現状は、「ブレーキ」の機能不全を(a)ニョジツに示しているように思われる。

機能不全の原因はさまざまで複合的だが、ここではマスメディア、とくにテレビという「場」について考えることでその原因の一端に触れてみよう。

[A]、言語生活そのものが言語運用能力のトレーニングの場だとすると、その「場」は重要になる。なぜなら、言語を運用していくにあたって、「類推」が重要だからだ。(1)あらゆる語、あらゆる表現を最初から身につけて言語生活をスタートするわけではないから、言語を使いながら、自身の言語を広げ、しっかりとしたものにしていく。その時に、知っている「情報」を使って知らない「情報」について「類推」する。子供の「類推」ははずれてしまうこともあり、ほほえましい話として紹介されることもあるが、そうした「[X]」も経験しながら、だんだん「類推」の力も強化されていく。類推というトレーニングの「場」はいくつもある。今日、その最大のものがマスメディアであることは言うまでもないだろう。

「[Y]」であれば、新聞や雑誌を読む、本を読むというようなことがそうした「場」の中心にあるだろう。「[Z]」であれば、家族や友人といった個人的な「コミュニティー」でのやりとり、あとはテレビだろうか。その他にＳＮＳ（Social Networking Service）を介した「電子的なやりとり」があるだろう。

本はあまり読まない、ということになると、「書きことば」のトレーニングの場は、新聞や雑誌が主なものとなる。新聞や雑誌もそれほど読まない、ということになると、「書きことば」をトレーニングする「場」が[B]あまりない、ことになる。また、「場」の劣化は、「書きことば」を劣化させてしまうだろう。「書きことば」の習得には、「書きことばはこんな風に多くの「情報」を収めることができるのだと」いう「気づき」と、進んでそうしたいという意欲がなければならない。「書きことば」が後天的に獲得されるものであることからすれば、書き手が意識的になれる環境が大事になる。そうした環境をマスメディアは作り上げようとしているだろうか。

また、「書く」だけで一切読まない人はいないだろうし、「読む」だけで一切書かない人もいないはずだ。「書く」「読む」「話す」「聞く」を言語の「四技能」ととらえると、一つ一つが独立しているように思いそうだが、「書く」と「読む」、「話す」と「聞く」とは当然(b)ヒョウリ一体の関係にある。「双方向的（interactive）」ということがいろいろな場面で言われるようになっているが、言語活動はまさしく「双方向的」である。

[C]、「書く」ためのトレーニングは、まずは書いてみることであろうが、しっかりした「書きことば」を「読む」ことは重要だ。「しっかりした書きことば」が(c)ソンザイしていても、それを読まなければ「しっかりした書きことば」を実感することができない。「しっかりした書きことば」が失われつつあるのだとすると、トレーニングの場であるマスメディアに何かが起こっていると考えられる。

いかなる言語にも「書きことば」と「話しことば」がある、と述べてきた。そして、それぞれが独立した言語態である一方で、それぞれは「回路」でつながっているというのが筆者の「言語モデル」だ。

日常生活を考えてみると、「書きことば」寄りの生活をしている人、「話しことば」寄りの生活をしている人、いろいろだろう。[D]、どちらか一方だけに接している人は、多くはないだろう。そのように考えると、日常的な生活空間は「書きことば」と「話しことば」とによってうめられていることになる。そういう日常的な生活空間を「言語空間」と言い換えてみよう。「言語空間」には「書きことば」「話しことば」、両者の中間的な「打ちことば」が響き合い、それぞれが影響を与え合っている。

『広辞苑』は「マスメディア」を「マス-コミュニケーションの媒体。新聞・出版・放送・映画など。大衆媒体。大量伝達手段」と説明している。「大衆」は多くの人がそれに接するということ、「大量」は毎日のように、大量の情報がこの媒体によって提供されているということになる。現在では、これにTwitterやFacebookというような情報の発信・受信手段が加わっている。これらも総体としてとらえれば、「大衆媒体」「大量伝達手段」といってよい。「話しことば」の「器」として、放送、Twitter、Facebookなどがはたしている役割は大きいことが推測される。これら全体が発信している「情報」量は、「新聞・出版」の発信している「情報」量に(d)ヒッテキ

するか、それ以上ではないだろうか。

そうなると、「マスメディア」のことも視野に入れる必要がでてくる。本稿は「書きことば」の変容について述べることをテーマとしているが、上記のようなことから、ここにおいては、「マスメディア」特に、(e)コウハンな受け手を有しているテレビにおいて、どのような言語が使われているかということを話題にしていきたい。

(2)言語に関しては「類推」が重要であることについては述べた。「類推」とは自身が接した他者の言語のありようから探るということでもある。テレビが「公性」のたかいメディアであると考えると、そこで使われていることばは「公性」がたかいことになる。テレビ視聴者に（なんとなくにしても）そうした「心性」があるとすれば、テレビのことばは、類推のもとになる可能性がある。新聞も同様だ。TwitterやFacebookを使用している人が、どの程度そこに「公性」を認めているかわからないけれども、そこでやりとりされていることばは、ある程度にしても「認められている」と感じるのが自然であろう。(3)「大量」に使われていることばが不適切であるとは、なかなか思わないだろう。

「話しことば」で起こることは「書きことば」でも起こる、「書きことば」で起こることは「話しことば」でも起こると考えると、E「話しことば」についても観察しておくのがよいことになる。

（今野真二『うつりゆく日本語をよむ―ことばが壊れる前に』による）

注「打ちことば」…「話しことば」「書きことば」に対して、携帯電話やパソコンのキーを打って書かれた語句・語法。また、その文章。

問1　傍線部(a)～(e)の片仮名を漢字に直しなさい。

問2　空欄 A ～ E に入る最も適当な語句を次のア～キの中から選び、記号で答えなさい。ただし、同一の記号は一度しか使えないものとする。

ア　そもそも　　イ　つまり　　ウ　したがって　　エ　さて
オ　やはり　　カ　また　　キ　しかし

問3　空欄 X ・ Y ・ Z に入る適当な語句を本文中から抜き出し、答えなさい。

問4　傍線部(1)「あらゆる語、あらゆる表現を最初から身につけて言語生活をスタートするわけではない」とあるが、書きことばについてはどのように述べているか、ほぼ同じ内容を述べた箇所を本文中より十字以内で抜き出し、答えなさい。

問5　傍線部(2)「言語に関しては「類推」が重要であることについては述べた」とあるが、本文中ではどのように端的に述べられているか。本文中の語句を用いて答えなさい。「～重要」に続く形で、十字～二十字で記すこと。

問6　傍線部(3)「「大量」に使われていることばが不適切であるとは、なかなか思わない」のはなぜか。本文中の語句を用いてその理由を答えなさい。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

翻訳という語は、筆者にとって、あくまで日本語である。翻訳という行為を、あくまで日本語の行為として考える。筆者が翻訳と言うとき、それはたとえば translation, traduction, Übersetzung, traducción, traduzione といった英仏独西伊のいずれの外国語をも念頭においていない。

もちろん翻訳という語も行為も、外国語があって初めて成り立つ。それを承知で言うのだ。

翻訳は、日本という一国での営みである。

もっとも外国で翻訳を読む読者があるし、外国で翻訳の原稿用紙を埋めた経験が筆者も一度ならずあるから、厳密にはこう言うべきだろう。翻訳は、日本語という一国語の(a)圏内における営みである、と。

行為だ営みだと、もったいをつけずに言おう。

要するに、翻訳は日本語の問題である。結局は、それに尽きる。

(1)三島由紀夫は『文章読本』の中でこう述べる。

一般読者が翻訳文を読む態度としては、わかりにくかつたり、文章が下手であつたりしたら、すぐ放り出してしまふことが原作者への礼儀だらうと思はれます。日本語として通じない文章を、ただ原文に忠実だといふ評判だけでがまんしいしい読むといふやうなおとなしい奴隷的態度は捨てなければなりません。

（『三島由紀夫全集』第二十八巻、新潮社）

三島のいう「翻訳文」が、つまり日本語が、重要なのだ。外国語を相手にして二国語間を往復し、しかし仕上げて(b)公にする翻訳とは、日本語という一国語の表現である。一国語の質の善し悪しがすべてだ。翻訳した外国語の原文を言訳(いいわけ)に持出して泣言(なきごと)を並べるのを、しばしば見かける。翻訳者が(2)「翻訳文」として自立していないものを世に送り出したことを懺悔(ざんげ)したところで、それはただたんにみっともない。

そういう一国語主義者であるからして、ここでは translation や traduction といった話はしない。話のついでに英訳や仏訳を援用することもあろうが、その場合は、それが翻訳に、すなわち日本語の問題にかかわると考えるからである。

もちろん一国語主義者とて、translation 論や traduction 論にまったく無知なのではない。

一つだけ例を挙げれば、(3)十九世紀のイギリス詩人・批評家マシュー・アーノルドに On Translating Homer というホメロスの英語訳を論じたものがある。百六十頁のこの英語本は、この種のもので筆者が丹念に読んだ一冊だ。

ホメロスは進展が(c)迅速であり、語と文体が平明であり、想念が素朴であり、作風が気品高い、と、マシュー・アーノルドは X 。十七世紀のジョージ・チャップマンによるホメロス英訳に不満を語り、チャップマン訳へのソネットの(d)頌歌を書いたジョン・キーツを、原典が読めないのに英語訳を判断できるはずがない、と、 Y 。

なんらかの示唆を得ないわけでもない。しかし論じられているのは、translation なのであって、翻訳ではない。ここでは、外国人の translation, etc. 論をあれこれ紹介することはしない。実際、筆者の内部で、そうした知識はたんなる知識にとどまる。自分自身がホメロスへの一つの接近(アプローチ)として読んだ本だからだ。

(4)木下杢太郎の『浴泉歌』という詩集に、こういう行(くだり)がある。

マラルメの美しき句章をトルストイは不可解と(e)罵つた。なんとトルストイの一国(いつこく)さよな。

（「珈琲壺と林檎と」）

広辞苑には、

【一刻】②（「一国」とも書く）頑固なこと。人の言を聞かず、腹立ちやすいこと。

むろん、杢太郎の用いている「一国」はこの意味だ。そしてここでは、翻訳とは日本語という一国語の問題であると主張する点で、一国さを貫く。

（柳瀬尚紀『翻訳はいかにすべきか』による）

※引用中の旧字体は、新字体に改めた。

問1　傍線部(a)～(e)の漢字の読みを平仮名で答えなさい。

問2　空欄［X］・［Y］に入る最も適切な語句をそれぞれの語群の中から選び、記号で答えなさい。

〈空欄［X］の語群〉

ア　責める　　イ　断じる　　ウ　高じる　　エ　見くびる　　オ　教唆する

〈空欄［Y］の語群〉

ア　肩を並べる　　イ　耳を疑う　　ウ　口を挟む　　エ　切って捨てる

オ　舌を巻く

問3　傍線部(1)「三島由紀夫」の作品を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　李陵　　イ　雪国　　ウ　砂の女　　エ　潮騒　　オ　竜馬がゆく

問4　傍線部(2)「「翻訳文」として自立していないもの」とは何か。本文中より十二字で抜き出し、答えなさい。

問5　傍線部(3)「十九世紀のイギリス詩人・批評家マシュー・アーノルドにOn Translating Homerというホメロスの英語訳を論じたものがある」が、これは筆者にとってどのようなものであったか。筆者が捉えているものとは異なるものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア　知識といえるもの

イ　多少の示唆を得たもの

ウ　翻訳といえるもの

エ　丹念に読んだもの

オ　ホメロスを理解するために読んだもの

問6　傍線部(4)「木下杢太郎の『浴泉歌』という詩集に、こういう行がある」について、

（1）木下杢太郎は、詩集『邪宗門』の作者とともに反自然主義を代表する詩人・劇作家である。詩集『邪宗門』の作者を答えなさい。

（2）筆者はなぜ、木下杢太郎の行を引用したのか。筆者の意図を本文中の言葉を用い、簡潔に答えなさい。